

## 閉会の辞

伊吹 敦\*

この度、ベルナルド・フォール先生を始め、国内外から多くの専門家を  
お招きして、国際シンポジウム「初期禅宗史研究の最前線」を開催できま  
したことは、私ども「国際禅研究プロジェクト」にとって心からの喜びで  
す。このような大規模な国際シンポジウムの開催は、昨年「道元研究国  
際シンポジウム」に続くものです。そのシンポジウムの際に基調講演をお  
願いした竹村牧男学長先生には、今回、わざわざ初日にご臨席頂き、「開  
会の辞」を賜りましたが、これは哲学を建学の理念とする東洋大学の立場  
を明らかにするもので、学長先生には、心からの感謝の念を申し述べたい  
と存じます。

二日間にわたって発表された研究を一瞥して痛感しますのは、一口に「初  
期禅宗史研究」と申しましても、その研究方法は実に様々だということ  
です。一篇の敦煌文書や、禅宗に特徴的な一側面を集中的に取り上げる研究  
もあれば、地論・撰論などの先行する思想と初期禅宗思想との関係につ  
いて論じるものもあり、禅宗教団と戒律の関係、更には、中国の禅宗でタブ  
ーとされてきた「性」の問題を扱うものもあるといった具合です。こうした  
研究の多面性は、そのまま初期禅宗史研究が持つ大きな可能性を示すもの  
と言えるでしょう。

私個人のことを申し上げますと、ここに集まってこられた先生方の中  
には、古くから面識のある方もいらっしゃいますし、ここ数年になって何度  
かお会いする機会に恵まれた方もいます。また、今回、初めてお会いでき  
た先生もおられます。これは私だけのことではなくて、参加された先生方  
全てについて言えることではないかと思えます。私たちが文部科学省の科

---

\*東洋大学文学部教授

研費を受けて「国際禅研究プロジェクト」を立ち上げた真の理由は、世界の禅研究者が交流を持つ機会を設けることで禅研究を高度化したいというところにありました。今回のシンポジウムは、「初期禅宗研究」という分野において、正しくその目的を達成するものになったと思います。

ここで私ごとではございますが、この分野における偉大な先達である故ジョン・マクレイ先生の思い出と、ベルナール・フォール先生への感謝の念を述べさせて頂きたいと存じます。

もう十年以上前のことですが、マクレイ先生には、東洋大学の東洋学研究所で講演をして頂いたことがあります。たまたま日本滞在中で、それを聞きつけた研究所の所長が、講演を依頼したということだったと思います。その講演内容は全く憶えていないのですが、強烈に印象に残っていることが一つだけあります。それは「ビキニ姿の女性の大きな絵が描かれたネクタイをしていた」ということです。余りに珍しいので、不躰にも、それについてお尋ねしたところ、「日本では公式の場ではネクタイをしなないといけないですからね」とおっしゃっていました。これは形式ばかりを重んじる日本社会への強烈な批判です。その時、私は、禅を研究する人はこうでなくてはいけないと感心したものです。先生は、立派な学者でしたが、単にそれに留まらず、禅を生きていたのです。最近、禅と戒律の問題がしばしば取り上げられるようになりましたが、今思うと、マクレイ先生はそれを先取りしていたのではないかとすら思います。

一方、フォール先生に初めてお会いしたのは、もっと早く、二十数年前、まだ東洋大学に就職する前のことです。フォール先生が書かれた論文によってその着想の素晴らしさに感嘆していた私は、駒澤大学で講演会があると聞いて出かけ、それまでに書いた論文を何篇か持参して献呈しました。その時は、名刺代わりに差し出したつもりだったのですが、その一週間後でしたか、京都で印度学仏教学会があり、思いもかけず、そこで先生に再会しました。そして、その時の会話で、先生が既に私の論文を読んで内容を理解しているのを知って驚きました。そして尊敬するフォール先生に読

んでいただけたことを心から喜びました。その後、しばらくして、先生がアメリカで出版した本、「The Will to Orthodoxy: A Critical Genealogy of Northern Chan Buddhism」を入手したところ、以前にお渡しした論文が引用されているのを見て、再び大喜びしました。その後もずっと、今に至るまで、フォール先生に著書で言及していただけたことが、私の研究の大きな励みになっています。私が今まで研究を続けられたのは、一つにはフォール先生のお陰なのです。

以上は私ごとに過ぎませんが、研究者にとって他の研究者との出会いがいかにか重要な意味を持つかを示すものあることは間違いないでしょう。これまで自分の年齢を意識する暇もなかったのですが、参加者の顔ぶれを見ますと、いつのまにか年長の部類になっているようです。このシンポジウムが、参加された研究者の方々に、特に若手の研究者の方々に良い出会いの機会を提供できるものとなりましたことを心から祈念して、このシンポジウムを終えたいと思います。皆さん本当に有り難うございました。